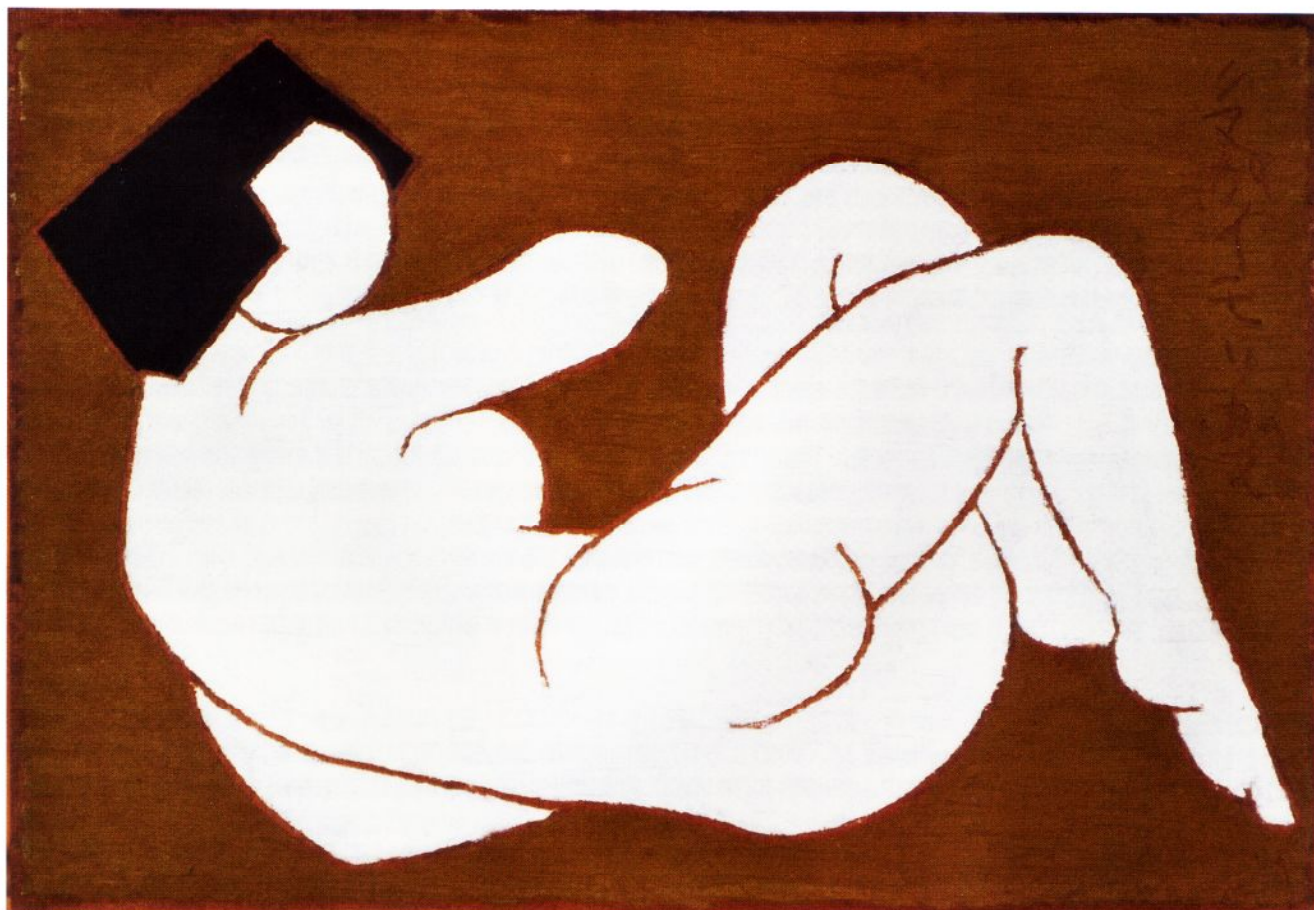


熊谷守一

ベフルス
ふくやま美術館

2013年1月23日(水)－4月7日(日) 会場:常設展示室

※月曜休館／ただし2月11日(月)は開館、2月12日(火)は休館



2.熊谷守一《白い臥裸婦》

熊谷守一は、鮮やかな色彩と明瞭な輪郭線が特徴の画風を確立させ、日本近代美術史に大きな足跡を遺した画家です。

今泉篤男に「美術家の自伝として一つの傑作」と評された熊谷の著作『へたも絵のうち』、そして『青蠅』は、その世俗を超越した生き方やその生涯が作家自身の言葉でユーモラスに語られていて、多くのファンに支持されています。

1880(明治13)年、岐阜県恵那郡付知村(現・中津川市付知町)に生まれた熊谷は、東京美術学校(現・東京芸術大学)に入学し画家の道を歩み始めました。1915(大正4)年、創設間もない二科展に参加、以後30年間、同展に独自の作風を探究する作品を発表し続けます。「自分を出して自分を生かすしかない⁽¹⁾」という制作姿勢を貫く熊谷は、何ものにも惑わされることなく、自分と向き合い、戦後、「モリカズ様式」と呼ばれる画風を確立させました。この様式の特徴を顕著にあらわすのが《白い臥裸婦》(1962年)(No.2)です。

熊谷のモチーフは、裸婦、動植物、風景というごくありふれたものです。それらのものが、熊谷の色彩と形態として表現された時、そこに私たちは今まで気づかなかった生命の息吹を感じることができます。それは、熊谷の対象の本質に迫る確かなまなざしによって引き出されたものなのです。

この度の所蔵品展では、安田コレクション、世良コレクション、そしてふくやま書道美術館の栗原コレクションにより、熊谷守一の画業の一断面を紹介いたします。



1.《女の顔》

I. 画業の始まり

熊谷守一は、3歳の時、生家の実母と離され、岐阜市内の二人の妾が同居する実父のもとで過ごした。「私はもう小さいときから、おとなのすることはいっさい信用できないと、子供心に決めてしまったフシがあります⁽²⁾」と、この複雑な環境が彼に大きく影を落す。小学校にあがる頃、「ばあや以外は、おとなはみんなウソのかたまりだ⁽³⁾」と感じていた彼は、人と距離をおく少年だった。「人にこびたり、逆に人を押しのけて前に出ることはしなかったから、こわいと思う人などいないのです⁽⁴⁾」という、何ものにも動じない熊谷の強い精神力は、この幼いころの環境に起因したものであったようだ。

17歳の時、画家になる決意を固めた彼は、公立美術学館で日本画の基礎を学ぶ傍ら、週末は東京帝国大学工学部で石膏像のデッサンに黙々と励む。1900(明治33)年、東京美術学校に入学、黒田清輝、藤島武二、長原孝太郎らの指導を受ける。ここで熊谷は、暗闇の中の光の表現を徹底的に追求し始めた。この頃から親交を深めた山下新太郎は、熊谷について「君の性質には何か前人未発のことに手を着けようとする、また着け得る特質がある⁽⁵⁾」と彼の絵画に取り組み姿勢について述べている。こうした熊谷の作品は、山下、和田三造を始めとする多くの友人たちに注目され、その傲慢な態度から同級生に敬遠されていた青木繁からも一目置かれた。さらに、恩師黒田も彼の絵を高く評価していた。逆に熊谷は、黒田を評価せず、「ヨーロッパのふつうの絵の稽古の仕方というものを輸入した。だからそういう功績はあるけれども、あれは絵じゃないわ、とにかく⁽⁶⁾」と

述べ、黒田の外光派を学ぼうとしなかった。

熊谷は、1909(明治42)年、第3回文部省美術展覧会に出品した《蠟燭》(岐阜県美術館所蔵)により褒状を受け、その成果を見せる。人にこびない、人をおしのけない熊谷は、何者にも警戒心を抱かせることなく、何にも臆することなく自分の作風を追求することができたのだった。

II. 二科会への参加

実母の死をきっかけに、1910(明治43)年、郷里・付知村にもどった熊谷は、そのまま村にとどまり、絵とは無縁の生活を送る。彼が再度上京し、制作を再開するのは5年後、1915(大正4)年、35歳の時のことである。

それは、彼の上京の前年、文部省美術展覧会の審査に不服を持ち二科会を結成していた友人たちにとっても吉報だった。彼は、山下新太郎や斎藤豊作、石川確治らにすすめられるままに、第2回二科美術展覧会(以下、二科展)に《女》《牛》《馬》を出品し、翌年、《習作》《赤城の雪》を出品した第3回二科展で会員推挙となる。

「子供が病気になって暮しに困ったときでも、そのために絵を描いて金にかえるということはできませんでした。やる気のあるときに描くだけです。気のないときに描いても何にもなりませんから、そういうときに描きません⁽⁷⁾」とどんなに生活が困窮を極めようとも、金銭のために絵筆を握ることは決してできなかった熊谷だが、この二科会だけには、一時解散する第30回二科展まで、ほとんど休むことなく参加している。

III. 画風の変遷

第3回二科展出品作《赤城の雪》(岐阜県美術館所蔵)は、《蠟燭》にみせた暗い色調から、一転して、荒い筆触で雪景色が捉えられたものである。ここで見せた躍動感あふれる筆致は、その後1928(昭和3)年、第15回二科展出品作《陽の死んだ日》(大原美術館所蔵)のように、色彩で形態を捉えた激しいものになる。

そしてその3年後、第18回二科展に《女の顔》(No.1)が出品される。モデルは画家の妻と考えられる。荒く無造作な筆致のように見えるが、よく見ると色彩が複雑に絡みあっていることがわかる。三日月形の眉、見開かれた眼、通った鼻筋、引き締まった口元には、夫の画業を見守り続ける女性の力強さが浮かびあがる。そして、緑色が施されたほつれた髪が、決して豊かとはいえない生活の疲労感も滲ませる。児島喜久雄はこの作品について、「現今あの位に現実的の迫力を有った顔を描き得る画家は他にありさうもない、殊にあの『女の顔』は石井君の『緑衣』の女の顔などとは比較にならない写実の力を示している⁽⁸⁾」と高く評価している。塗り残された板の木目、左ほおから顎にかけての赤い線は、この後、彼が取り組むことになる、輪郭線の探求の予兆を感じさせる。

しかし、ポスト印象派や未来派の影響を受けた安井曾太郎や東郷青児のように、熊谷が画壇に新風を巻き起こすことはなかった。1935(昭和10)年、美術雑誌『中央美術』に熊谷の特集が組まれた時の紹介記事において、「比年二科会に陳列される彼の作品、時には宝玉の輝きを発する事はあつても世間の評家と云ふ人々は、例の変人の絵か位に看過するかして、数行の活字を以てさえ取扱はれない事もある。然も熊谷君は依然として二科会の重鎮だ」と記されている。熊谷が、あまり注目されていなかったことを示しているが、彼は幼いころに培われた精神をもって、粛々と自分の絵をむきあっていたのである。

そして同誌に寄せられた石川確治の「熊谷守一身边雑記」に、「此頃は絵が描けさうになつたよと言つて、彼はにこにこしている⁽⁹⁾」という一文があるとおり、熊谷は、この頃から輪郭線に対する様々な取り組みを見せ始める。

まず、1936(昭和11)年、第23回二科展出品作《山形風景》(天童市美術館寄託)にその一歩が踏み出された。ここに示された薄塗りの画面に赤鉛筆の下書きの線が残されたその画面は、「即興的な写生の小品⁽¹⁰⁾」としかとらえられない向きもあったが、熊谷は淡々と輪郭線の探求を続ける。その3年後の1939(昭和14)年、第26回二科展出品作《桑畑》(岐阜県美術館所蔵)では、塗り込められた画面に太い輪郭線で風景を浮きあがらせた。そして10年後、輪郭線を強調せずにはっきり分割した《仲餅》(愛知県美術館所蔵)のような作品があらわれる。

この輪郭線による単純な形態と明快な色彩の探求について、熊谷のコレクターでもあり、よき理解者でもあった木村定三は、「水墨画を太い線で描いた経験が油画の場合にも、太い線で物象を区切ることを可能にした⁽¹¹⁾」と日本画の表現の影響を読み取っている。谷川徹三も同様

に「それは不断にものを見て、見て、見て、見抜いたところから生まれた輪郭線だから、単純の中に高い密度をもって生きている線だ。それは東洋画における線の伝統を受けている⁽¹²⁾」と指摘している。また木村に対して、熊谷はこの輪郭線に対する様々な試みをしていた1939(昭和14)年頃を「そのころ気分が大きくなって太い線で区切ることができるようになった⁽¹³⁾」と語ったという。熊谷が浜田葆光に勧められ水墨画を描き始め、木村と出会うきっかけとなった「熊谷守一・新毛筆画展覧会」が開催されたのが、この頃なのである。

その前年、1938(昭和13)年に、野間仁根にすすめられ、「熊谷守一・野間仁根作品発表二人展」を開催、画廊に本格的に登場し、そして、1940(昭和15)年第27回二科展では、「熊谷守一誕生60年記念特別陳列」により、明治中期から昭和13年に至る主要作品41点を回顧、「改めてこの画家の並みでない才を物語る⁽¹⁴⁾」とその業績が注目をあび始める。1942(昭和17)年には初めての画集、『熊谷守一画集』も刊行された。こうした評価が高まる中で、熊谷の探求は続けられた。

IV. モリカズ様式の確立

熊谷は、1943(昭和18)年、第30回二科展に《裸婦》を出品したのを最後に戦後再開された二科展に参加することはなかった。そして輪郭線に対する様々な試みを繰り返しながら、1953(昭和28)年頃から、輪郭線を塗り残すという独自の手法を定着させ始め、モリカズ様式といわれるものを確立させる。これは単純な形態と色彩を全面におしだしたもので、晩年まで彼の画風の軸となっていく。

この塗り残しの手法は《白い臥裸婦》(No.2)によって確認することができる。裸婦を捉えたやわらかな輪郭線をよくみると、板の木目と赤い粒子が見える。これは彼が赤鉛筆の色が落ち、木目がでることを想定し生み出した線である。画面に埋没した線は裸婦の白い肌を前面に押し出す。彼は色彩の塊としてその対象を見事に捉え直して見せたのである。

裸婦は熊谷が数多く手掛けた題材の一つだった。景色をみても裸体を見出すことができ、また裸体から景色を見出すこともできた⁽¹⁵⁾。熊谷は、《裸婦》(No.3、No.15、No.18)、《化粧》(No.4)にみられるように女性特有のなだらかな線を瞬時につかみ、その量感を巧みに表現する。

V. 日本画と書

18歳の時に共立美術学館で基礎を学んで以来、約40年ぶりに手がけられることになった熊谷の日本画は、淡墨画である。濃淡は筆で描き分ける。題材は自宅の庭にさく草花やそこに集まる昆虫など身近な生き物が多い。「以前はよく庭に蓆を敷いてそこに寝ました。地面の高さで見ると庭はまた別の景色で、蟻たちの動きを見ているだけで夕方になったときもあります⁽¹⁶⁾」とその庭の生態を堪能する熊谷は、蟻の歩く際の足の出方まで熟知していた⁽¹⁷⁾。こうした観察力による蟻の生き生きとした描写が桃の甘い香りを想像させる《桃に蟻》(No.9)に活かされている。

書は浜田葆光の家で弘法大師空海の複製書《一行阿闍梨耶》を見、後に真似たことがきっかけとなっている。「中学生でも読みやすいかわめて無難な書き方であるが、全くその文字の意味のような感じを与える⁽¹⁸⁾」と対象の本質を捉える画家ならではの書を最初に依頼したのは木村定三である。書と日本画にあらわれる熊谷の墨の線は、画家の鋭敏なまなざしと、謙虚な人柄が交錯する独得のしなやかさをみせている。

VI. 木版画

今回展示している版画(No.17~No.22)は、1977(昭和52)年1月に出版された、熊谷最後の木版画集、『熊谷守一版画集 サムホール』からのものである。

熊谷の木版画は、1943(昭和18)年の版画集『大東亜の花ごよみ』全3集のうちの第2集におさめられた《山百合花》を最初に、『朝陽』『白猫と壺』(1962年)の3点、木版画集としては、『熊谷守一版画集』(1962年)、『熊谷守一画集』(1967年)、『熊谷守一画集』(1968年)、『熊谷守一木版画集』(1969年)、『熊谷守一木版画集』(1971年)、『熊谷守一版画集』(1972年)、『熊谷守一木版画集』(1973年)、『熊谷守一版画集 四季』(1975年)、『熊谷守一扇面木版画集』(1975年)にこの『熊谷守一版画集 サムホール』をあわせた10作品の存在が『熊谷守一 生前 全版画集』(2007年)によって明らかにされている。

『熊谷守一版画集 サムホール』の刷りは1972年の『熊谷守一版画集』、1975年の『熊谷守一版画集 四季』を手がけた鉄井孝之によるもので、彫りは『熊谷守一版画集 四季』の長島道男である。これらはサムホール(絵画サイズ22.7×15.8cm)の油彩画として描かれた作品がもととなっており、画家の肉筆ではないものの、常に一方方向へ塗り込めることによってみせた色彩の輝きが一流の彫師、刷り師によって再現されている。

熊谷は、この版画集を出版した同年8月、97歳でその生涯を終えた。

VII. 不屈の精神

熊谷は、画家を目指してから、他の追従を許さない明快な色彩と形態によるモリカズ様式を生み出すまで、約50年を費やしている。彼は半世紀にわたり、自分の絵と闘い続けてきたのだった。しかし、それは、熊谷にとって、「私の絵が長い間にずいぶん変わってきているので、どうしてそんなに画風が変わったのか、とよく聞かれます。しかしこれには「若いころと年をとってからでは、ものの考え方や見方が変わるので、絵も変わった」としか答えられません。自然に変わったのです⁽¹⁹⁾」という極めて自然な流れだった。

熊谷は、二科会という時代に敏感な美術団体に属しながらも、「いくら時代が進んだっていても、



15. 《裸婦》



9. 《桃に蟻》



18. 《裸婦》



17. 《アヤメ》

結局、自分自身を失っては何ともなりません。自分にできないことを、世の中に合わせたってどうしようもない。川に落ちて流されるのと同じことで、何にもならない⁽²⁰⁾と決して自分を見失うことはなく、何人、何事に対しても不屈の精神を貫き通した。そして「別に望みというようなものはありません。だがしいて言えば「いのち」でしょうか⁽²¹⁾」というこの画家が最も愛おしむ生命の輝きを、作品の中に息づかせる色彩と形態を探りあてたのである。

熊谷の画面から滲み出されるその輝きは、豊かな色彩の生命力みなぎる作品で、日本の近代洋画史を牽引し続けた梅原龍三郎をも魅了するものであった。梅原は、熊谷の作品を自ら買い求め、ルノワール、ルオーやピカソと共に客間に並べていた⁽²²⁾という。

(学芸課次長 宮内ちづる)



25.《愛は神なり》

略年譜

年(西暦/和暦)	年齢(歳)	出来事
1880 明治13		4月2日、岐阜県恵那郡付知村(現・中津川市付知町)に熊谷孫六郎、タイの3男4女の末子として生まれる。
1900 明治33	20	9月、東京美術学校西洋画科選科に入学、黒田清輝、藤島武二らの指導を受ける。
1904 明治37	24	7月、東京美術学校西洋画科選科を首席で卒業。卒業制作は《自画像》。
1905 明治38	25	8月、農商務省樺太調査隊に、調査書に添付する説明の絵を描く要員として参加。 このときのスケッチは、関東大震災で焼失した。
1908 明治41	28	10月、第2回文部省美術展覧会(文展)に《肖像》を出品、初入選する。
1909 明治42	29	10月、第3回文展に《蜷蜩》を出品。褒状を受ける。後に広島県知事などを歴任した湯澤三千男が購入した。
1910 明治43	30	5月、第13回白馬会展に《裸死》《習作》を出品。10月、母タイが亡くなったことをきっかけに故郷付知に戻り、この後5年にわたる山村生活を営む。ふた冬は付知川の奥で日傭の生活を送る。
1915 大正4	35	6月、東京に戻る。
		10月、第2回 二科美術展覧会(以下、二科展)に《女》《牛》《馬》を出品。
1916 大正5	36	10月、第3回二科展に《習作》《赤城の雪》を出品。会員推荐となる。 以後、第8回二科展、第11回二科展を除き、一時解散する第30回二科展まで毎年同展に参加。
1922 大正11	42	9月、和歌山県日高郡南部町の大江為次郎の次女・秀子(24歳)と結婚。
1926 大正15 昭和元	46	この頃、妻・秀子は質屋通いをするなど生活は困窮を極める。
1931 昭和6	51	9月、第18回二科展に《肖像》(現題名:有島生馬像)、《女の顔》を出品。
1932 昭和7	52	暮れに豊島区長崎町(現・東京都豊島区千早町)に自宅を新築して転居。晩年までここで過ごす。
1938 昭和13	58	2月、野間仁根にすすめられ「熊谷守一・野間仁根作品発表二人展」(銀座・日動画廊)を開催。 12月、浜田葆光の勧めで開催した「新毛筆画展覧会」(丸善名古屋支店)をきっかけに、実業家木村定三と親交が始まる。
1940 昭和15	60	8月、第27回二科展第10室にて、「熊谷守一生涯60年記念特別陳列」が開催され明治中期から昭和13年に至る主要作品41点を展示。
1945 昭和20	65	11月、二科展が再開されるが参加を辞退。
1947 昭和22	67	4月、二紀会の結成に誘われ初めは辞退するが、気持ちがかかり、会員となる。1951年まで同会に出品。
1948 昭和23	68	7月、雑誌『心』が創刊され、8月には武者小路実篤や志賀直哉の推薦で同人になる。
1951 昭和26	71	5月、第16回清光会に《猫》と《牡丹》を出品。《猫》は梅原龍三郎が購入。 梅原龍三郎の推薦で清光会同人となる。
1954 昭和29	74	5月、清光会が解散。以後一切の団体展から離れる。
1962 昭和37	82	4月、戦後初の本格的な回顧展「熊谷守一展」(主催:日本経済新聞社)開催。
1964 昭和39	84	5月、パリのダヴィッド・エ・ガルニエ画廊で個展開催。
1967 昭和42	87	文化勲章の内示を辞退する。
1971 昭和46	91	6月から7月にかけて日本経済新聞記者・田村祥蔵が春頃から熊谷に聞き書きを始め、同紙に「私の履歴書」として連載。11月、これをもとにした『へたも絵のうち』が日本経済新聞社より刊行される。
1972 昭和47	92	5月、文化庁からの勲三等叙勲の内示を辞退する。
1976 昭和51	96	2月、随筆集『蒼蠅』(求龍堂)を刊行。 6月、岐阜県恵那郡付知町に熊谷守一記念館が設立される。 11月、日本洋画商協同組合展に《アゲ羽蝶》を出品。この作品が絶筆となる。
1977 昭和52	97	1月、最後の木版画集、『熊谷守一版画集 サムホール』(影り:長島道夫/刷り:鉄井孝之/300部限定)が加藤版画研究所より刊行。 8月、肺炎のため逝去。
1985 昭和60		5月、豊島区の住居の跡地に熊谷守一美術館が開館。
1996 平成8		5月、熊谷守一記念館が岐阜県付知町となり、新築される。

註

- (1) 熊谷守一「二科会時代・戦後」『へたも絵のうち』(2000年 平凡社ライブラリー)(1971年 日本経済新聞社刊行)、143頁
- (2) 熊谷守一「生い立ち」同書、25-26頁
- (3) 熊谷守一「生い立ち」同書、27頁
- (4) 熊谷守一「生い立ち」同書、33頁
- (5) 山下新太郎「前人未達の仕事をなす男」『中央美術』第19号 1935年、41頁
- (6) 聞きて 東野芳明「明治」熊谷守一『美術手帖』1965年1月号、87頁
- (7) 熊谷守一「私のことなど」『蒼蠅』(1976年 求龍堂)、33-34頁
- (8) 児島喜久雄 東京朝日新聞掲載「第18回二科展批評」『二科70年史1914-1943』編:二科70年史編集委員会(1985年 日本経済新聞社)、282頁
- (9) 石川確治「熊谷守一 身辺雑記」『中央美術』前掲書、47頁
- (10) 日本美術年鑑、昭和12年版、二科70年史 1914-1943前掲書、295頁
- (11) 木村定三「熊谷さんの芸術」『熊谷守一作品撰集』(1969年 日本経済新聞社)所収:『熊谷守一 木村定三コレクション』(2004年 愛知県美術館)、136頁
- (12) 谷川徹三「熊谷守一の人と芸術」『現代日本美術全集18巻 鉄五郎 熊谷守一』(1974年 集英社)、95-96頁
- (13) 木村定三「熊谷さんの芸術」『熊谷守一作品撰集』前掲書、135頁
- (14) 瀧俣三「二科70年史 物語編 V戦時1、日中事変下」『二科70年史1914-1943』前掲書、209頁
- (15) 熊谷守一「こころ」『別冊太陽 気ままにえのみち 熊谷守一』(2005年 平凡社)、44頁
- (16) 熊谷守一「九十六の春」『蒼蠅』前掲書、67頁
- (17) 木村定三「熊谷さんの人間像」『熊谷守一作品撰集』前掲書、11頁
- (18) 木村定三「熊谷さんの芸術」『熊谷守一作品撰集』前掲書、139頁
- (19) 熊谷守一「二科会時代・戦後」『へたも絵のうち』前掲書、146頁
- (20) 熊谷守一「かまきり」『蒼蠅』前掲書、189頁
- (21) 熊谷守一「はじめに」『へたも絵のうち』前掲書、12頁
- (22) 今泉篤男「熊谷守一その人と絵」『今泉篤男著作集2 洋画論 近代日本』(1979年 求龍堂)、242頁

参考文献

- 『へたも絵のうち 展覧会 熊谷守一ものがたり』図録
(2002年 編集・発行:茨城県近代美術館)
『熊谷守一 生前 全版画集』
(2007年 編集:池田良平 発行:岐阜新聞社)
『小さな画面に無限の世界 熊谷守一展』図録
(2011年 監修:池田良平 編集:伊丹市立美術館 発行:神戸新聞社)

【編集後記】

遅咲きの画家・熊谷守一が頭角を現すようになるのは、ようやく50歳を越えたあたりからである。この時期の二科展出品作《女の顔》は、表現主義的な粗い筆により妻の烈しい内面をあぶりだしているように見える。熊谷の初期作品のなかでも画期をなす逸品。この作品は、新たに寄贈を受けた安田コレクションのひとつである。「熊谷守一」特集は、最近良質の寄贈作品により当館コレクションが充実している一例を示す展示として企画されたものである。

(学芸課長 谷藤史彦)

第1室：熊谷守一

* 寄託作品

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	所蔵
1	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔	1931	油彩, カンヴァス	41.0×32.0	安田コレクション
2	熊谷守一		白い臥裸婦	1962	油彩, 板	15.6×22.7	安田コレクション
3	熊谷守一		裸婦		パステル, 紙	38.0×26.0	安田コレクション
4	熊谷守一		化粧		パステル, 紙	36.0×26.2	世良コレクション
5	熊谷守一		蛙		紙本淡彩	31.0×42.0	世良コレクション
6	熊谷守一		砂浴	1977 頃	紙本墨画淡彩	45.4×37.8	世良コレクション
7	熊谷守一		なすび	1972 頃	紙本墨画	27.1×24.1	世良コレクション
8	熊谷守一		栗		紙本墨画淡彩	26.5×24.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
9	熊谷守一		桃に蟻		紙本墨画淡彩	32.0×41.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
10	熊谷守一		銀杏		紙本墨画淡彩	27.5×24.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
11	熊谷守一		柿		紙本墨画淡彩	38.5×54.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
12	熊谷守一		柿		紙本墨画淡彩	26.5×23.5	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
13	熊谷守一		やまめと笹		紙本墨画淡彩	26.5×23.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
14	熊谷守一		立雛		紙本墨画淡彩	34.0×25.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
15	熊谷守一		裸婦		紙本朱墨	45.0×54.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
16	熊谷守一		竹		紙本朱墨	27.5×25.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
17	熊谷守一		アヤメ [熊谷守一版画集サムホール]	1977	紙本木版	26.0×20.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
18	熊谷守一		裸婦 [熊谷守一版画集サムホール]	1977	紙本木版 (加藤版画研究所 番号/鉄井孝之)	26.0×20.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
19	熊谷守一		たねまき [熊谷守一版画集サムホール]	1977	紙本木版 (加藤版画研究所 番号/鉄井孝之)	26.0×20.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
20	熊谷守一		柚 [熊谷守一版画集サムホール]	1977	紙本木版 (加藤版画研究所 番号/鉄井孝之)	20.0×26.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
21	熊谷守一		なす [熊谷守一版画集サムホール]	1977	紙本木版 (加藤版画研究所 番号/鉄井孝之)	20.0×26.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
22	熊谷守一		干大根 [熊谷守一版画集サムホール]	1977	紙本木版 (加藤版画研究所 番号/鉄井孝之)	20.0×26.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
23	熊谷守一		本来無一物		紙本墨書	82.0×33.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
24	熊谷守一		壽		紙本墨書	63.0×33.5	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
25	熊谷守一		愛は神なり		紙本墨書	41.0×32.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
26	熊谷守一		五風十雨		紙本墨書	23.0×45.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
27	熊谷守一		南無阿彌陀佛		紙本墨書	67.0×30.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
28	熊谷守一		流水不爭先		紙本墨書	105.0×32.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
29	熊谷守一		淡如水		紙本墨書	33.0×57.0	栗原コレクション(ふくやま書道美術館)
30	梅原龍三郎	(1888-1986)	百合	1973	油彩, カンヴァス, 板	45.7×38.0	佐藤コレクション
31	浜田葆光	(1886-1947)	風景		油彩, カンヴァス	39.4×51.5	
32	野間仁根	(1901-1979)	瀬戸内海		油彩, カンヴァス	43.0×48.0	

第2室：日本の近現代美術

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	
33	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩, カンヴァス	116.7×91.0	
34	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩, カンヴァス	89.3×72.8	*
35	梅原龍三郎		仙酔島の朝	1932 頃	油彩, カンヴァス	65.5×80.5	*
36	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6×45.7	
37	岸田劉生		静物 (赤き林檎二個とビンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7×45.8	
38	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9×41.0	
39	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2×24.8	
40	須田国太郎	(1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩, カンヴァス	48.5×59.7	*
41	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩, カンヴァス	90.9×72.7	
42	吉田卓	(1897-1929)	卓上静物	1925	油彩, カンヴァス	91.0×73.0	
43	野口彌太郎	(1899-1976)	タンジールにて	1975	油彩, カンヴァス	130.3×97.3	

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)	
44	高橋秀	(1930-)	ブルーボール#101	1971	油彩,カンヴァス	142.0×190.0	
45	松本陽子	(1936-)	再び生命体について	2008	油彩,パステル,木炭,カンヴァス	200.0×200.0	
46	松本陽子		荒野での試み	2010	油彩,パステル,木炭,カンヴァス	194.0×259.0	
47	高松次郎	(1936-1998)	パイプをくわえた男	1970	油彩,カンヴァス	72.7× 90.9	
48	高松次郎		形(No.1201)	1987	油彩,カンヴァス	218.0×182.0	
49	荒川修作	(1936-2010)	緩慢な動きの中の認識できないものを調整し続ける(ナンバー)	1973-74	油彩,アクリル,カンヴァス	165.0×246.5	
50	金島桂華	(1892-1974)	緑陰遊鯉		紙本着色	59.0× 68.3	*
51	福田恵一	(1895-1956)	千利休	1946	絹本着色	186.0×186.0	*
52	山口華楊	(1899-1984)	芍薬		紙本着色	31.5× 40.5	佐藤コレクション
53	豊福知徳	(1925-)	風塔'83	1983	マホガニー	174.0× 70.0× 54.0	
54	鰐 嘸	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩,木	75.0× 45.0× 50.0	
55	野田正明	(1949-)	可能性	2005	ブロンズ	50.0× 49.0× 40.0	

第3室：ヨーロッパ美術

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)	
56	ジュゼッペ・パルッティ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩,カンヴァス	49.0× 72.0	
57	ウジェーヌ・カリエール	(1849-1906)	腕組みの座る女		油彩,カンヴァス	46.0× 38.0	
58	ジョヴァンニ・セガティニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩,カンヴァス	120.0× 87.0	
59	ジャコモ・バッラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩,カンヴァス	51.0× 60.5	
60	アンドレ・ドラン	(1880-1954)	婦人像	1925	油彩,カンヴァス	61.0× 73.8	
61	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵(17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩,パネル	81.0× 60.0	*
62	ウンベルト・ボッチョーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩,カンヴァス	58.0× 46.0	
63	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩,板	51.0× 65.0	
64	ソーニャ・ドローネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩,カンヴァス	100.0× 220.0	
65	マリオ・シローニ	(1885-1961)	無題	1922	黒鉛,紙	18.0× 18.0	
66	クルト・シュウィッターズ	(1887-1948)	抽象19(ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩,厚紙	69.5× 49.8	
67	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩,カンヴァス	80.0× 60.0	
68	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩,カンヴァス	60.0× 47.0	
69	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩,ガラス,カンヴァス	60.0× 50.0	
70	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩,パステル,紙,カンヴァス	194.0× 150.0	
71	メダルド・ロッソ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス,石膏	37.0× 30.0× 17.0	
72	アルトゥーロ・マルティネーニ	(1889-1947)	牛	1943/89	ブロンズ	28.5× 34.0× 13.0	
73	オットー・グートロイド	(1889-1927)	ヴィキ(立体主義的頭部)	1911-13	ブロンズ	33.1× 25.0× 25.0	
74	ベリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0× 80.0× 90.0	

和室 松本コレクション「利休忌」

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横(cm)	
75	宙宝宗宇	(1760-1838)	利休像画賛	江戸時代	紙本墨画、墨書	92.0×34.5	*
76	八代中村宗哲	(1828-1884)	隅田川都鳥香合	1848	桜材	(高)3.7×(口径)5.7	*
77			利休瀬戸茶入 元伯在判	江戸時代	陶	(高)9.0×(口径)3.7 (胴径)6.3	*
78			斗々屋茶碗 銘 深山木	朝鮮王朝時代	陶	(高)6.3×(口径)12.7 (高台径)5.2	*
79	久田宗全	(1647-1707)	赤茶碗 銘 幽楽	江戸時代	陶	(高)8.5×(口径)8.5~8.8 (高台径)3.6~3.8	*